九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『プロレタリア芸術とアヴァンギャルド : せめぎあう「物」と「身体」の一九二〇-三〇年代』

波潟, 剛
九州大学大学院比較社会文化研究院

https://doi.org/10.15017/19425

出版情報：九大日文. 15, pp.72-75, 2010-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎イベント・レビュー

『プロレタリア芸術とアヴァンギャルド ――せめぎあう「物」と「身体」の一九二〇‐三〇年代――』

波潟 剛 NAMIGATA Tsuyoshi

二〇一〇年三月一日と二日の両日、立命館大学の衣笠キャンパスで、立命館大学国際言語文化研究所とプロレタリア芸術研究会の共催によるイベントが開催された。

初日は五名の報告とそれに基づくディスカッション、二日目は四名の報告とディスカッションに加えて関連企画として映画上映や展示が行われるなど、盛りだくさんの内容だった。私自身は二日目の途中で会場を離れることになったが、中座ではあっても非常に面白い試みだったという印象を抱いている。そこで全体の報告記としては不完全ではあっても、初日のコメンテーターとしての意見を交えながらイベント・レビューを記しておきたい。

イベント主催者が用意したパンフレットの裏側には今回のイベントに関する趣旨が綴られている。そのなかに次のような一節がある。「日本でのプロレタリア芸術とアヴァンギャルドの関係は、ロシア革命初期のプロレタリア文化建設においてロシア・アヴァンギャルドが中心的な役割を果たしたのと同じようには展開しませんでした。アナキズムはもとより、ダダ・未来派的な形式も早い段階から排除されていきました。しかし、そうした歴史認識をいったん中断してみれば、何が見えてくるのでしょうか」。ここで述べられているのは、日本におけるプロレタリア芸術とアヴァンギャルドとの「切断」ということだろう。もちろんこれは従来そういう見方が支配的だったということであり、今後、研究のうえでどのような「接続」が可能なのかを探るのがイベントの目指すところだったと理解する。

いわゆる「プロレタリア芸術」と「アヴァンギャルド芸術」が日本で成立する過程は、当然のことながら、西欧のそれとは時期も経緯も異なる。また場合によっては、ロシアでのケースが特殊な事例だったという見方をも想定し得る。だとみれば、そもそも日本ではどのような文脈から、プロレタリア芸術やアヴァンギャルド芸術が受容され、普及、定着するに至ったのかを問う必要がある。この意味で、初日の報告は文学、絵画、演劇、漫画といった観点から、新たな「接続」に向けてのさまざまな提案がなされた。

一人目の報告は木股知史氏（甲南大学）の「回覧雑誌『密室』の画文共鳴――象徴主義とモダニズムの通路をめぐって――」だった。一九一〇年代における絵画、版画などの視覚芸術と文学とを共鳴させる試みの場となった創作版画誌『月映』。同誌の刊行に関わった恩地孝四郎、藤森静雄、田中恭吉らが参加し

ていた回覧雑誌『密室』における「総合芸術」の試みが、アヴァンギャルドの前史としての可能性を秘めているという内容だった。また、無意識への関心が強く見られる点も指摘され、シュルレアリスムといった表現様式が導入される以前の状況を考慮し、日本における象徴主義とアヴァンギャルドの時代との関わりを再検討する重要性が喚起された。

二人目の報告は滝沢恭司氏（町田市立国際版画美術館）の「『美術』の進出――人形座にみる大正期新興美術運動の様態――」だった。人形劇とアヴァンギャルとは意外な組み合わせにも見える。だが、美術、演劇、舞踏といった分野が融合する場として、大正期末のアヴァンギャルドの一端を担っている様子が明らかになった。「人形座」はメーテルリンクの翻案から始まって、ウィットホーゲル、小山内薫、岡本一平、イワン・ゴルなどの作品を上演し、象徴主義の時期からプロレタリア演劇へ、そして大衆的人形劇団へと変貌を遂げている。その変化も興味深かったが、新興美術家にとっては舞台芸術の貴重な現場だったという指摘にも新鮮さを感じた。

三人目の報告は足立元氏（東京芸術大学）の「漫画からみるプロレタリア文化運動」。この報告ではプロレタリア美術とエロ・グロ・ナンセンスとが、「革命的理念」／「変態的欲望」と相反する方向性を示しつつも、表現としては非常に似通う点があったことが示唆された。たとえば、ゲオルグ・グロッスの漫画を通じて昭和初期に柳瀬正夢が導入した裸体透視の線描は、資本家の欲望を暴露する点でプロレタリア美術の表現でもあり、資本家に寄り添う女性の裸体そのものが「エロ」の表現そのものでもあった。また、当時の人気漫画家小野佐世男は豊満な女性像を描き続けたが、同時代的な「物」への関心がプロレタリア漫画家たちと通底していたという指摘もあった。

四人目の報告は野本聡氏（法政大学中学高等学校）の「自慰と尖端――『マヴォ』とその周圏――」という刺激的なタイトル。矢橋公麿のコラージュ作品「私のオナニ」が『マヴォ』第四号（一九二四年一〇月）に掲載された点を手がかりに、「自慰」という概念をめぐって同時代のアヴァンギャルドに共鳴する論理を明らかにする試みだった。女郎を買い、そして殺そうとすることが自慰行為であるという倒錯的な表現が、吉行エイスケの文章に見られる点などを紹介。マヴォイストやその周辺の作家たちの「尖端」的な実践は、主体を解体し性の越境を試みる野心的な取り組みだったが、ホモソーシャル的側面を克服できていないのではという疑問も提示された。

五人目の報告は、今回のイベント仕掛け人でもある村田裕和氏（立命館大学）の「首のない体／字面のない活字――印刷術総合運動『死刑宣告』の身体性――」という報告。萩原恭次郎の詩集『死刑宣告』（一九二五年）は、日本におけるアヴァンギャルド文学を代表するものの一つ。そこで駆使された活字の選択や文字・記号配列における実験性が、実は、プロレタリア文学の弾圧で行使された伏字の文面が伴う効果と連動していたという斬新な視点を提供した。伏字の文面といっても印刷時における技術・方法は多様であることを今回あらためて問題とし、そ

こで文字にならなかった部分が示す文字への破壊性をアヴァンギャルドと接続する可能性が指摘された。

五名の報告に引き続いておこなわれた「ディスカッションⅠ」では、私が以下の四点をまずコメントした。一、当時プロレタリア芸術の担い手が想定した「大衆」と、エロ・グロ・ナンセンスの担い手が想定した「大衆」に違いはあったのか。二、エキゾティシズムという点から考えた場合、プロレタリア芸術／アヴァンギャルドの双方についてどのようなことがいえるのか。三、日本のアヴァンギャルド芸術にはマチズム的要素が共通して見られるのか。四、西欧のアヴァンギャルドが日本に移入・紹介される速度と、プロレタリア芸術が日本に移入・紹介される速度には違いがあったのか。これらのコメント後、各報告者からの回答、フロアからの質疑応答が続いた。

二日目の午前は、植民地との関係から二人の報告がなされた。

一人目は楠井清文氏（立命館大学衣笠総合研究機構）の『『亜細亜詩脈』という場――一九二〇年代朝鮮における詩雑誌のネットワーク――』。一九二六年から翌二七年まで「京城」で刊行された日本語文芸雑誌を対象にしていた。恥ずかしながら、福岡市文学館で全号所蔵という事実も今回の報告で初めて教わった。内野健児（帰国してからは新井徹名で活動）が創刊した雑誌で、「内地」と「朝鮮」との文学者が連帯することの可能性や困難さがうかがえる内容だった。前日で生じたプロレタリア芸術／アヴァンギャルドとエキゾティシズムとの関係に対する疑問とつながる点で、私自身はディスカッションの延長線上として興味深く聞いていた。

二人目はアンドレ・ヘイグ氏（スタンフォード大学大学院）の『『不逞鮮人』へのまなざし――一九二〇年代初期の左傾テキストと大衆メディアとの間に挟まったコロニアル意識と批判――』。この報告も「内地」と「朝鮮」との連帯を模索した日本人作家の考察だが、中西伊之助がマスコミやジャーナリズムをいかに操作し、「大衆」を味方につけるのかに苦心したのかという点に注目していた。新聞記者出身の中西が「不逞鮮人」という語を小説の題名に選択したのは、当時その語がジャーナリズムをにぎわす語であったことに起因すると指摘。そのうえで、イデオロギーだけでは克服できない民族の壁が作品に描かれつつも、彼の思想が朴烈・金子文子らに影響を与えたと指摘した。

私自身が参加したのはここまでである。よって、「映画上映・プロキノと能勢克男の時代 一九二七‐一九三七 ドキュメンタリーとアヴァンギャルドの越境」、それから、午後の報告、佐藤洋氏（早稲田大学大学院）「プロキノの映像と歴史をいかに継承するか？――プロキノのフィルムと研究をめぐる歴史――」、雨宮幸明氏（立命館大学大学院）「プロキノ作品における映像表現――『山宣渡政労農葬』を中心に――」については、具体的なコメントする立場にない。しかし、二日目午前の報告が終わった時点で、質問者として登場したのが在野の映画史家としては第一人者である牧野守氏であったことからすれば、プロキノに関する話題で午後も盛り上がったことは間違いない。

関連の企画展示「小型映画の芸術 プロキノと能勢克男の時

代」も、小型映写機パテベビーを始めとして、はたしてどこから集めてきたのかという貴重なものが散見された。関連展示に関する念の入れようは、イベント全体への意気込みとも重なる。報告者の選定や、企画上映、展示のどれを取っても、九州大学日本語文学会でも見習うべき点は多い。

今後、関連企画を継続して論集の刊行も視野に入れているという。私も何らかのかたちでまた参加したいと思っている。それはひとまず先の話としても、久しぶりにアヴァンギャルド関連の話に耳を傾ける機会があって正直良かった。参加者との懇親会で、自著の説明をしようとした際、重大な点を度忘れして我ながら絶句するという気の抜けた状況の「私」には。

そんな個人的なレベルを差し置いても、政治的前衛から見た芸術的前衛、そしてその逆に芸術的前衛から見た政治的前衛という双方向の視点からあらためて歴史的アヴァンギャルドを再検討、再評価する糸口がまだまだあると実感できるイベントだった。

なお、参考までに上映会の作品を以下に挙げておく。

●プロキノ作品（上映時間五〇分、サイレント）

1. 「第一二回東京メーデー」（一九三一）
2. 「スポーツ」（一九三一）
3. 「土地」（一九三一）
4. 「全線」（一九三二）
5. 「山本宣治告別式（東京）」（一九二九）
6. 「山宣渡政労農葬（京都）」（一九二九）

●能勢克男作品

（上映時間三五分、サイレント　＊一九九五年サウンド編集版）

1. 「疎水　流れに沿つて」（一九三四）
2. 「飛んでゐる処女」（一九三五）
3. 「土曜日一周年」（一九三七）

（九州大学大学院比較社会文化研究院准教授）